

## 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応

酒井 厚<sup>1</sup> 菅原 ますみ<sup>1</sup> 眞榮城 和美<sup>2</sup> 菅原 健介<sup>3</sup> 北村 俊則<sup>4</sup>

本研究では、中学生の学校適応の諸側面について、親および親友との信頼関係との関連から検討した。学校適応は、教室にいるときの気分（反抗的・不安・リラックス）と学校での不適応傾向（孤立傾向・反社会的傾向）について測定した。縦断研究に登録されている中学生270名（13.7歳）とその両親（母279名；父241名）を対象に解析を行い以下の結果を得た。1)親子相互の信頼感において、子どもの学校適応に影響を与えているのは子が親に抱く信頼感の方であり、親が子に抱く信頼感の関連が認められなかった。また、子が親に抱く信頼感に関しては、母親に対するものばかりではなく父親に対する信頼感も学校適応に重要な役割を担うことが示唆された。2)親子間相互の信頼感得点の高低から分類した親子の信頼関係タイプによる結果では、総じて親子相互信頼群の子どもの学校適応がほぼ良好であるのに対し、親子相互不信群の子どもの学校に不適応な傾向が示された。3)親友との信頼関係が学校適応に与える影響に関しては、学校で不適応な傾向にある親子相互不信群において特徴が見られ、「孤立傾向」や「リラックスした気分」の変数では学校への適応を良くする防御要因として働く一方で、「反社会的傾向」の得点はより高めてしまうという促進要因ともなりうることを示された。

キーワード：学校適応，親子関係，信頼感，親友，中学生

### 目 的

現代の教育現場は、学級崩壊や不登校、いじめなどの生徒の様々な学校適応に関する問題を抱えている。このような学校での不適応現象の背景として、受験によるストレスや学校での子どもの学業パフォーマンスに対する親の過剰な期待など、学校ストレスと総称される大きな負荷があり、それらが現代に生きる子どもたちの学校生活に共通してネガティブな影響を及ぼしているとの指摘もある（伊藤, 2000）。総じて高いストレス状況に置かれた子どもたちが、それでも健全な学校生活を送っていくことができるためには、親や親友などの“重要な他者（significant other ; Sullivan, 1953）”との間に基本的信頼感（Erikson, 1963）を形成していることが必要であると考えられる。対人間の信頼関係と社会生活を営む上での個人の適応との関連については、これまでに社会心理学の分野で多く扱われてきており（小杉・山岸, 1998 ; Rotter, 1967）、なかでも青年・成人期における親友・恋人などの“重要な他者”との信頼関係が、自尊心や孤独感、人生における満足度やディス

トレスと深い関連のあることは多くの研究から示されてきている（Armsden & Greenberg, 1987 ; Bradford & Lyddon, 1993）。また、酒井（酒井, 2001a ; 酒井, 2001b）は、青年期における重要な他者（母親・恋人・友人〔親友を含む〕）との信頼感を測定する尺度の作成を通じて、こうした重要な他者との信頼感が“自分が相手に信頼される価値のある人物であるか”という自己への評価と、“相手が自分にとって信頼される価値のある人物かどうか”の他者への評価から構成されることを示し、これらの信頼感が青年期の孤独感や恋愛関係のあり方と関連することを報告してきている。

では、こうした重要な他者との信頼関係は、青年期以前の子どもの精神的健康や社会的適応と具体的にどのような関連があるのであろうか。例えば、学業での失敗や学級集団内でのいじめや孤立などの危機的なイベントに遭遇したときであっても、重要な他者との間に信頼感が形成されていれば子どもの精神的健康の悪化に緩衝的な効果を持つことが予想されよう（小嶋, 1991）。こうした子どもの対人関係と学校適応との関連を扱った研究は、子どもの精神的健康との関連で論じたもの（永井・金生・太田・式場, 1994）や、いじめや非行などの問題行動に関する包括的な調査の一部（総務庁青少年対策本部, 1997）として散見されるものの未だ関連の研究は少ない。そこで、本研究は中学生期にある子どもにとって重要な他者であると考えられる親および親

<sup>1</sup> 国立精神・神経センター精神保健研究所  
〒272-0827 千葉県市川市国府台1-7-3

<sup>2</sup> 白百合女子大学大学院

<sup>3</sup> 聖心女子大学

<sup>4</sup> 熊本大学

友との信頼関係を取り上げ、学校での反社会的な行動や孤立などの不適応的傾向との関連について検討することを目的として実施された。

親との間に信頼関係を形成できていることが、子どもの精神的健康や問題行動などに大きく関わることはこれまで多くの研究によって認められてきた。そのひとつである Bowlby (1969/1976) の愛着理論では, Ainsworth, Blehar, Waters & Wall (1978) による乳幼児と親のインタラクションに関する実験研究から、乳幼児期の養育者との関係が適切で応答性の良いものであるほど、その時点やその後における子どもの精神的な安定性が高いことが示された。また、幼児期における親との不安定な関係が、その後の児童期における男児の攻撃性や引きこもり傾向を予測していることを明らかにした研究 (Renken, Egeland, Marvinney, Mangelsdorf & Sroufe, 1989) や、児童期において親との暖かい関係が欠如していることが成人期における孤独感の高さを予測することを示した研究もある (Perlman & Peplau, 1981)。愛着研究以外にも、児童・思春期における親子間の信頼関係に基づいた子どもへのしつけの質やスーパービジョン、情緒的・物理的なサポートが、同時点での反社会的傾向 (Farrington, 1978 ; Patterson, 1986) や攻撃性、薬物使用などの問題行動や抑うつ等の精神的健康に関わることが示されてきた (Flannery, Williams & Vazsonyi, 1999 ; Fondacaro & Heller, 1983 ; Wills & Cleary, 1996)。

このように、親との信頼関係が子どもの社会適応にとって重要であることが理解される一方で、子どもの家庭外での対人関係が飛躍的に広がる児童・思春期以降は、友人や教師などの家庭外での重要な他者も視野に入れて検討される必要がある。特にわが国では、「ダブルスクール化」と呼ばれる学習塾の利用傾向が高まる現象 (文部省, 1994) が認められ、思春期の子どもが一日の生活を家庭外において友人と過ごすことが多くなる傾向 (東京都練馬区児童部児童課, 1997) にあり、中学生が社会性を育み健康な毎日を過ごすために友人が果たす役割は親と同様に大きなものであることが予想される。

仲間関係と学校における孤独感との関連については、学校で拒否されたり人気のない子どもがそうでない子どもに比較して孤独感や不満足感を高く感じているという結果 (Cassidy & Asher, 1992) や、友人関係を救いがなく親密なものでないと感じている子どもが孤独感をより感じる傾向にあること (Parker & Asher, 1993) が示されている。このように友人関係をひとつくくりとして比較的広義な捉え方をしている研究に対し、仲間・友

人関係をその親密さなどからいくつかの形態に分けて検討した研究 (Bukowski & Hoza, 1989 ; Wentzel & Caldwell, 1997) もある。これらの研究での分類によれば、仲間関係がクラスメートなどのグループにおける存在が含まれるのに対して、友人は自発的に形成された二者関係であり、話しあうことが多くお互いに助け合う間柄であることが期待される仲である (Davis & Todd, 1985) と考えられる。さらに Argyle & Henderson (1985) によれば、友人のなかでも“親友 (best friend)” は、信頼し秘密を打ち明けることができ、精神的な支えになる存在であるとされている。子どもの問題行動や学校適応との関連を考えていく上でも、こうしたいわゆる友人にも様々な信頼感の濃淡 (仲間→友人→親友) があることを考えていくことが必要であろう。本研究では、友人の中でも特に、心理的関与度の高い親友を取り上げて、その役割について親子関係とともに考察していくことにしたい。

親友との関係と子どもの精神的健康や学校などでの問題行動との関連について、高校生の問題行動や情緒的な問題を生み出す対人関係要因について検討した Garnefski & Diekstra (1996) の研究では、親友と呼べる存在がいない個人ほどけんかや盗みなどの問題行動や、うつ病や集中力の欠如などの情緒的な問題があることが示されており、わが国でも、親友の存在が中学生の主観的健康度を高めることを中山ら (中山・藤内・北山, 1997) が報告している。

以上のように、思春期における親や親友との関係がこの時期の精神的健康や問題行動と関連があることが示されてきているが、従来の研究では、この2つの存在による影響は独立に検討されることが多かった。しかし、中学期の学校適応をこうした重要な他者との信頼関係からより包括的に理解していくためには、家庭内での関係 (親など) と、家庭外での関係 (親友など) の両者を同時に把握し、比較検討していく必要があると考えられる。

そこで本研究は、中学1年生から3年生を対象として、母親、父親、親友それぞれの関係における信頼感が、子どもの学校適応にどのように影響するのかについて同時に検討することを目的とする。特に、親子関係については、親から子への信頼感と子から親への信頼感の双方について測定を実施し、親子の相互的信頼関係のあり方からも考察を行う。

## 方 法

対象者 1984年8月～1986年2月までの間に神奈川県

某市市立病院産婦人科を受診した1,360名の母親が妊娠・出産・子育てに関する縦断研究 (Kitamura, Sugawara, Sugawara, Toda & Shima, 1996 ; 菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井, 1999) に登録された。これまでの調査時期は、妊娠初期・中期・後期・出産後5日目・1ヶ月目・6ヶ月目・12ヶ月目・18ヶ月目・6年目・9年目・11年目・15年目の計12時点である。出産後1ヶ月までは当該病院内で調査を実施し、以降は質問紙については郵送によって配布・回収した。

本研究は、2000年に実施した15年目の追跡調査(郵送によって配布・回収)に応じた母親279名、父親241名、子ども270名(男性:131名,女性:137名,不明:2名)によるものであり、母親の平均年齢は43.61歳(33歳~54歳)、父親は47.03歳(35歳~64歳)、子どもは13.71歳(13歳~15歳)であった。

**調査手続きと内容** 今回(出産後15年目)の調査では、母親用、父親用および子ども用の質問紙を作成し、お互いのプライバシーを護るために3者別々の封筒で回収をおこなった。今回の分析に使用した測定尺度は以下の通りである。

**親子間の信頼感に関する項目** 酒井(2001a)が作成した青年期の愛着関係における信頼感を測定する尺度を改変し、子ども本人が母親・父親それぞれとの関係における信頼感を評定する子ども用と、母親・父親のそれぞれが自分の子との関係における信頼感を評定する母親用・父親用の計3つの信頼感尺度を作成した。これらの尺度では、信頼感を、“相手にとって自分は信頼される価値のある存在と思えるかどうか”という自己評価と、“自分にとって相手は信頼できる存在であると思えるかどうか”という相手への評価(他者評価)を同時に尋ね測定する。子ども用尺度の項目は、「お母(父)さんはあなたのことが一番好きだと思いますか」、「あなたといっしょにいてお母(父)さんは幸せだと思いますか」、「お母(父)さんをだれよりも信らうことができますか」、「あなたはお母(父)さんが好きですか」、「あなたは、お母(父)さんには何でも話せますか」の5つであり、1:全くあてはまらない~7:非常によくあてはまるの7段階評定で回答を求めた。尺度の構造を確認するため主成分分析を行ったところ、母親に抱く信頼感尺度に関しては、第1成分の寄与率が60.43%と高く一次元性のものと解釈した。父親に抱く信頼感尺度についても同様に一次元性が確認され、寄与率は68.40%であった。両尺度における項目の内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、母親に対するもので $\alpha = .89$ 、父親に対するもので $\alpha = .88$ であった。そ

のため、これ以降の解析では対象児が母親・父親に抱く信頼感として、各5項目を加算した得点を、子が母親に抱く信頼感尺度の得点、子が父親に抱く信頼感尺度得点とした。

一方、母親用・父親用の信頼感尺度に関しては、「この子は誰よりも私になついていると思う」、「この子は誰よりも私が好きだと思う」、「この子は私と一緒にいて幸せだと思う」、「この子が何を欲しいか、どうしてもらいたいかは誰よりも私が理解できると思う」、「この子は私の気持ちがよく分かると思う」、「この子のことは信頼できる」の6項目で構成し、1:あてはまらない~4:あてはまるの4段階評定で尋ねた。母親・父親のそれぞれが子に対して抱く信頼感の構造に関しても同様に、主成分分析により検討した。その結果、母親が子どもに対して抱く信頼感では第1成分の寄与率が56.84%、父親が子どもに対して抱く信頼感では第1成分の寄与率が56.47%で、どちらも1次元性であることが示された。各尺度における内的整合性に関しては、母親版の $\alpha$ 係数が $\alpha = .85$ 、父親版が $\alpha = .84$ でありどちらも十分な値であった。これ以降の解析では、母親・父親のそれぞれが子に抱く信頼感として、各6項目を加算した得点を、母親が子に抱く信頼感尺度得点、父親が子に抱く信頼感尺度の得点とした。

**親友との信頼関係に関する項目** Self Perception Profile for Children(Harter, 1988)の邦訳版(稲葉, 1998; Kosawa, Azuma, Kashiwagi, Suzuki, Shimizu, Gjerde & Cooper., 1996)の中で、友人関係評価(Social Acceptance)に関する項目を使用した。本研究では、親友の有無を確認する項目として「秘密を話すことができる親友がいる」、「自分と同じ立場になって物事を考えてくれる親友がいる」、「個人的なことを分かち合える親密な友達がいる」の3項目を使用した。各項目は、1:いいえ、2:少しいいえ、3:少しはい、4:はいの4段階評定で回答を求め、各項目の得点を合成して「親友との信頼関係」得点とした。これら3項目間の信頼性係数 $\alpha$ は.86であり、十分な値を示している。

#### 学校適応に関する変数

(1)教室にいる時の気分 子どもが教室にいる時に感じる気分について測定するために、家庭にいるときの気分を尋ねる家庭の雰囲気尺度(菅原・小泉・詫摩・菅原, 1997)を参考にして14項目の尺度を作成した。この尺度について、固有値1以上を基準にした因子分析(主因子法・varimax回転)から3因子を抽出した(TABLE 1)。第1因子は、「頭にきてキレそうになる(.88)」や「イライラする(.79)」などの反抗的で落ち着かない気分を表す

5項目から構成されたため、教室での反抗的な気分因子(以下,反抗的な気分)と命名した。第2因子は、「さみしい(.89)」や「ひとりぼっち(.75)」、「不安だ(.68)」などの孤独感や不安感についての5項目からなり、教室での不安な気分因子(以下,不安な気分)と命名した。これらの2つの因子と異なり、第3因子は、「ほっとする(.81)」、「あたたかい感じがする(.75)」などのポジティブな気分を表す4項目で構成されており、教室でのリラックスした気分(以下,リラックスした気分)とした。各因子の内的整合性については、第1因子が $\alpha = .92$ 、第2因子が $\alpha = .85$ 、第3因子が $\alpha = .87$ であった。

(2)学校への不適応傾向尺度 学校での不適応的な行動や気分を測定するために、小泉(1995)の学校適応感尺度などを参考にして、「学校のみならず嫌われている気がする」、「学校では、みんなの中にうまく入れない」などの孤立傾向を内容とする10項目と、「先生に反抗したり、乱暴したことがある」や「授業中、つまらなくなって教室をぬけだしたことがある」などの反社会的傾向に関する6項目の計16項目の尺度を作成した。この尺度について主因子法による分析(varimax回転)を実施し、2因子で回転させたところ、TABLE 2のような結果を得た。2因子までの累積寄与率は41.67%である。第1因子(固有値=4.87)を孤立傾向因子(以下,孤立傾向)、第2因子(固有値=2.90)を反社会的傾向因子(以下,反社会的傾向)と命名した。各因子の内的整合性を求めたところ、第1因子で $\alpha = .92$ 、第2因子で $\alpha = .85$ であり各因子の信頼性が確認された。

TABLE 1 教室にいるときの気分に関する尺度の構造 (主因子法 varimax 回転 値は因子負荷量)

項目	第1因子	第2因子	第3因子
<第1因子：教室での反抗的な気分>			
頭にきてキレそうになる	.88		
イライラする	.79		
がまんできない	.79		
むかつく	.78		
あばれたくなる	.72		
<第2因子：教室での不安な気分>			
さみしい	.89		
ひとりぼっち	.75		
不安だ	.68		
こわい	.61		
きんちょうする	.53		
<第3因子：教室でのリラックスした気分>			
ほっとする	.81		
あたたかい感じがする	.75		
楽しい	.74		
のびのびできる	.72		
寄与率(%)	25.03	20.43	18.63
信頼性係数	$\alpha = .92$	$\alpha = .85$	$\alpha = .87$

TABLE 2 学校での不適応傾向に関する尺度の構造 (主因子法 varimax 回転 値は因子負荷量)

項目	第1因子	第2因子
<第1因子：孤立傾向>		
学校のみならず嫌われている気がする	.81	
学校では、みんなの中にうまく入れない	.77	
学校のみならず私のよさがわかっていない	.71	
学校では私のよいところが生かされない	.68	
学校ではみんなからのけものにされている気がする	.65	
学校ではあまり目立なくてつまらない	.65	
友だちにいじめられたことがある	.53	
学校ではかつやくする機会がない	.52	
学校ではよくからかわれたり、ばかにされたりする	.51	
クラスの人と話していて、楽しいと感じることがある<逆転項目>	-.49	
<第2因子：反社会的傾向>		
先生に反抗したり、乱暴したことがある		.73
授業中、つまらなくなって教室をぬけだしたことがある		.72
授業中、大声を出したりしてさわいだことがある		.63
先生をいじめたことがある		.63
授業中、じっとすわっていることができなくて		.61
立ち歩いてしまったことがある		
友だちをいじめたことがある		.47
寄与率(%)	25.95	15.72
信頼性係数	$\alpha = .92$	$\alpha = .85$

以降の分析では、以上の2つの尺度(子どもが教室にいる時に感じる気分尺度・学校への不適応傾向尺度)で抽出された各因子を構成する項目の合成得点を、学校適応感に関する諸変数の得点とした。

## 結 果

### 両親および親友との関係における信頼感と学校適応に関する各変数との関連

母親、父親、親友それぞれとの関係における信頼感が、子どもの学校適応にどのように影響するのかについて検討するため、各関係での信頼感に関する5つの尺度得点(母親が子に抱く信頼感・父親が子に抱く信頼感・子が母親に抱く信頼感・子が父親に抱く信頼感・親友との信頼関係)を説明変数、学校適応に関する5因子を目的変数としたステップワイズ重回帰分析を行った(TABLE 3)。学校

TABLE 3 親子相互の信頼感及び親友との信頼関係と学校適応の諸変数との関連

目的変数	説明変数					R <sup>2</sup>
	母親が子に抱く信頼感	父親が子に抱く信頼感	子が母親に抱く信頼感	子が父親に抱く信頼感	親友との信頼関係	
<教室での気分評定>						
反抗的な気分	-.09	.01	-.07	-.29**	-.06	.08**
不安な気分	-.04	.03	.03	-.19**	-.19**	.08**
リラックスした気分	-.03	-.04	.23**	.00	.35**	.22**
<不適応傾向>						
孤立傾向	.03	.02	-.07	-.21**	-.31**	.17**
反社会的傾向	-.12	.04	-.29**	.08	.19**	.08**

\*\* $p < .01$

適応に関する各目的変数との間に有意な関連が見られた説明変数は、子が母親および父親に抱く信頼感と親友との信頼関係であった。まず、子が母親に抱く信頼感「リラックスした気分」に対しての $\beta$  (標準化偏回帰係数) が正に有意な値 ( $\beta=.23, p<.01, R^2=.22, p<.01$ ) を示し、「反社会的傾向」に対しては負に有意な値 ( $\beta=-.29, p<.01, R^2=.08, p<.01$ ) を示していた。一方、子が父親に抱く信頼感では、「反抗的な気分」( $\beta=-.29, p<.01, R^2=.08, p<.01$ ) と「不安な気分」( $\beta=-.19, p<.01, R^2=.08, p<.01$ ) および「孤立傾向」( $\beta=-.21, p<.01, R^2=.17, p<.01$ ) に対するいずれの $\beta$ も負に有意な値であった。以上から、母親と父親によって関連する学校適応の具体的な変数は異なるけれども、総じて子が親に抱く信頼感の高さは、学校に適応できていることを予測するものであることが示された。一方、親が子に抱く信頼感については、母親、父親のいずれの場合も、学校適応のどの諸変数との間にも関連は見られなかった。

親友との信頼関係に関しては、「不安な気分」( $\beta=-.19, p<.01, R^2=.08, p<.01$ ) および「孤立傾向」( $\beta=-.31, p<.01, R^2=.17, p<.01$ ) に対しての $\beta$ が負に有意な値であり、「リラックスした気分」( $\beta=.35, p<.01, R^2=.22, p<.01$ ) との間では正に有意な値であった。このことから、親友との間の信頼関係が高いことは、学校における不安な気分や孤立傾向が低下し、リラックスした気分が上昇することを予測していた。しかし、親友との信頼関係は、「反社会的傾向」に関しては、 $R^2$ の値は低いながらも正に有意な $\beta$ の値 ( $\beta=.19, p<.01, R^2=.08, p<.01$ ) が示されており、親友との信頼関係がある場合に、学校での反社会的な問題行動傾向が高まる可能性が示された。

#### 親子間の信頼関係タイプによる学校適応変数の得点比較

親子相互の信頼関係のタイプにより、子どもの学校適応の得点がどのように異なるかを、母子関係、父子関係のそれぞれについて検討した。親子間の信頼関係

のタイプは以下の方法で分類した。まず、母子関係については、子どもが母親に抱く信頼感の得点および母親が子に対して抱く信頼感の得点を、それぞれの平均値からH群・L群に分け、各群の組み合わせから4群を構成した。第1の群は、両者の信頼感得点がH群のもので、母子相互信頼群 ( $n=91$ ) とした。第2の群は、子が母親に抱く信頼感得点がL群、母親が子に抱く信頼感得点がH群であることから、母親一方向信頼群 ( $n=57$ ) とし、第3の群は、子が母親に抱く信頼感得点がH群であり、母親が子に抱く信頼感得点がL群に属するものであるため、子ども一方向信頼群 ( $n=43$ ) とした。第4の群は、両尺度の得点が共にL群であり、母子相互不信群 ( $n=73$ ) とした。父子間の信頼関係についても同様に、父子相互信頼群 ( $n=73$ )、父親一方向信頼群 ( $n=41$ )、子ども一方向信頼群 ( $n=44$ )、父子相互不信群 ( $n=74$ ) の4つの群に分類した。

これらの母子間・父子間それぞれの信頼関係における各4群を独立変数、学校適応に関する諸変数の得点を従属変数とする分散分析を行った (TABLE 4)。

その結果、母子関係については、「反抗的な気分」( $F(3,260)=3.40, p<.05$ ) と「リラックスした気分」( $F(3,258)=7.24, p<.01$ ) および、「孤立傾向」( $F(3,252)=5.38, p<.01$ ) と「反社会的傾向」( $F(3,259)=4.47, p<.01$ ) の4つの変数において群間に5%水準で有意な得点差が認められた。多重比較 (Duncan法, 5%水準) を行ったところ (TABLE 4)、「反抗的な気分」の得点に関しては、母子相互信頼群・子ども一方向信頼群<母子相互不信群であり、「リラックスした気分」の得点は、母子相互信頼群・子ども一方向信頼群>母子相互不信群・母親一方向信頼群という結果であった。また、「孤立傾向」得点については、母子相互信頼群<母子相互不信群・母親一方向信頼群 および、子ども一方向信頼群<母親一方向信頼群という関係が認められ、「反社会的傾向」の得点は、母子相互信頼群・母親一方向信頼群・子ども一方向信頼群<

TABLE 4 親子間の各信頼関係タイプによる学校適応変数ごとの得点差

	教室での気分評定			不適応傾向	
	反抗的な気分	不安な気分	リラックスした気分	孤立傾向	反社会的傾向
<母子間の信頼関係タイプ>					
母子相互信頼群	8.24(3.72) a	6.65(2.31)	12.64(2.90) a	15.60(5.15) a	8.05(2.67) a
母親一方向信頼群	9.21(4.17)	7.47(3.13)	10.39(4.03) b	19.53(6.43) b,c	8.35(2.47) a
子ども一方向信頼群	8.38(3.82) a	6.89(2.61)	12.33(3.45) a	16.31(5.25) d	8.40(2.90) a
母子相互不信群	10.15(4.97) b	7.22(3.53)	10.63(3.63) b	17.84(5.57) b	9.65(3.69) b
<父子間の信頼関係タイプ>					
父子相互信頼群	7.70(3.16) a	6.42(1.96)	12.84(2.80) a	15.46(4.66) a	8.13(2.78)
父親一方向信頼群	9.40(4.52) b	7.23(3.26)	10.21(3.81) b,c	18.02(6.00) b	8.66(3.19)
子ども一方向信頼群	8.50(3.94)	7.20(3.08)	12.39(3.40) d	16.72(6.06)	8.07(2.80)
父子相互不信群	10.11(4.89) b	7.38(3.56)	11.18(3.40) b	17.81(5.92) b	9.35(3.35)

対比較の結果、a, b間およびc, d間の平均値の差は有意 ( $p<.05$ )。Duncanの方法による。

母子相互不信群という結果であった。これらの結果から、総じて、母子相互不信群は他の群、とりわけ母子相互信頼群に比較して「反抗的な気分」、「孤立傾向」、「反社会的傾向」といった学校適応のネガティブな要素の得点が有意に高く、「リラックスした気分」が有意に低いという傾向が見られた。

次に、父子間の信頼関係に関しては、「反抗的な気分」( $F(3,228)=4.31, p<.01$ )、「リラックスした気分」( $F(3,226)=6.83, p<.01$ ) および「孤立傾向」( $F(3,221)=2.65, p<.05$ ) の3つの変数において群間に5%水準で有意な得点差が認められた。多重比較(Duncan法, 5%水準)を行ったところ(TABLE 4)、「反抗的な気分」の得点において、父子相互信頼群<父親一方向信頼群・父子相互不信群という結果が得られた。また、「リラックスした気分」の得点では、父子相互信頼群>父親一方向信頼群・父子相互不信群および、子ども一方向信頼群>父親一方向信頼群という関係が見られ、「孤立傾向」の得点に関しては、父子相互信頼群<父親一方向信頼群・父子相互不信群という結果であった。以上から、父子関係においても、母子関係に共通した傾向として、父子相互不信群が、父子相互信頼群や他の群に比較して学校適応にネガティブな要素の得点が有意に高く、「リラックスした気分」が有意に低いことが示された。

### 親子間の信頼関係および親友との信頼関係の高低と学校適応との関連

次に、親子間の信頼関係のタイプごとに、親友との信頼関係の高低が学校適応の諸変数にどのように関連するかについて、母子間、父子間のそれぞれについて検討した(TABLE 5およびTABLE 6)。解析に際し、親友との信頼関係が安定しているグループを“親友信頼H群”とし、親友との信頼関係に関する3項目全てにおいて4:はい, 3:少しはいのどちらかで答えた場合を該当するものとした。一方、親友がいないか、いてもその関係が希薄であるグループを“親友信頼L群”とし、3項目全てについて2:少しいいえ, 1:いいえのどちらかで答えた場合を該当とした。各グループの該当人数はTABLE 5およびTABLE 6に示した通りである。

はじめに母子間については、母子相互信頼群の場合に親友信頼H群がL群よりも「リラックスした気分」の得点が有意に高かった( $t=3.71, p<.01$ )。この母子相互信頼群では、他の学校適応に関するネガティブな項目において、親友信頼H群とL群の得点間に有意差は認められなかった。次に、母親一方向信頼群では、親友信頼H群がL群に比較して「リラックスした気分」の得点が有意に高く( $t=3.13, p<.01$ )、「孤立傾向」が有意

TABLE 5 母子間の各信頼関係タイプにおける親友との信頼関係の高低による学校適応の諸変数の得点差

親友との信頼関係	母子相互信頼群		母親一方向信頼群		子ども一方向信頼群		母子相互不信群					
	H群 (n=55-56) 平均(S.D.)	L群 (n=5) 平均(S.D.)	H群 (n=20-22) 平均(S.D.)	L群 (n=10-11) 平均(S.D.)	H群 (n=30-31) 平均(S.D.)	L群 (n=6) 平均(S.D.)	H群 (n=42-45) 平均(S.D.)	L群 (n=18) 平均(S.D.)				
			<i>t</i> 値		<i>t</i> 値		<i>t</i> 値					
<教室での気分評定>												
反抗的な気分	8.57(3.68)	6.00(2.24)	1.53n.s.	8.27(3.76)	9.82(4.56)	-1.04n.s.	8.10(3.63)	11.00(5.25)	-1.30n.s.	9.95(4.71)	11.72(5.98)	-1.12n.s.
不安な気分	6.47(2.32)	8.00(3.54)	-1.35n.s.	7.09(2.76)	8.73(3.88)	-1.40n.s.	6.57(2.40)	7.67(4.37)	-0.89n.s.	6.89(3.13)	8.22(4.91)	-1.07n.s.
リラックスした気分	13.31(2.63)	8.80(2.17)	3.71**	12.10(3.97)	7.64(3.44)	3.13**	12.90(3.31)	10.17(3.97)	1.80n.s.	11.38(3.47)	8.00(3.91)	3.37**
<不適応傾向>												
孤立傾向	14.78(5.02)	16.60(4.62)	-0.78n.s.	17.80(6.12)	23.70(5.19)	-2.61*	15.52(4.92)	20.67(6.68)	-2.22*	16.31(4.57)	20.00(7.30)	-1.99n.s.
反社会的傾向	8.53(2.99)	7.60(1.82)	0.68n.s.	8.27(2.64)	8.45(1.97)	-0.20n.s.	8.60(3.23)	8.67(2.50)	-0.05n.s.	10.78(4.39)	8.39(2.55)	2.69*

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

TABLE 6 父子間の各信頼関係タイプにおける親友との信頼関係の高低による学校適応の諸変数の得点差

親友との信頼関係	父子相互信頼群		父親一方向信頼群		子ども一方向信頼群		父子相互不信群					
	H群 (n=46-48) 平均(S.D.)	L群 (n=4) 平均(S.D.)	H群 (n=20-21) 平均(S.D.)	L群 (n=10) 平均(S.D.)	H群 (n=32-33) 平均(S.D.)	L群 (n=3) 平均(S.D.)	H群 (n=35-38) 平均(S.D.)	L群 (n=13-14) 平均(S.D.)				
			<i>t</i> 値		<i>t</i> 値		<i>t</i> 値					
<教室での気分評定>												
反抗的な気分	7.42(3.02)	8.25(4.72)	-0.51n.s.	8.85(4.45)	10.30(5.25)	-0.79n.s.	8.91(4.00)	11.00(5.57)	-0.85n.s.	9.92(4.40)	10.64(6.21)	-0.40n.s.
不安な気分	6.17(1.79)	7.50(4.36)	-0.60n.s.	6.30(2.49)	9.10(4.51)	-1.83n.s.	7.00(3.08)	9.33(5.86)	-1.17n.s.	7.05(3.10)	8.50(4.80)	-1.28n.s.
リラックスした気分	13.45(2.54)	9.50(0.58)	8.40**	11.75(3.60)	7.30(3.65)	3.18**	12.91(3.17)	7.67(5.51)	2.60*	12.30(3.24)	9.00(3.42)	3.20**
<不適応傾向>												
孤立傾向	14.52(4.30)	18.25(4.19)	-1.66n.s.	15.80(4.21)	22.20(7.81)	-2.42*	16.06(5.91)	21.67(9.50)	-1.51n.s.	16.40(5.53)	20.85(6.41)	-2.37*
反社会的傾向	8.28(3.01)	8.25(2.87)	0.02n.s.	9.43(3.89)	8.10(2.85)	0.96n.s.	8.53(3.10)	9.00(1.00)	-0.26n.s.	10.13(3.83)	8.14(2.03)	2.41*

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

に低かった( $t=-2.61, p<.05$ )。また、子ども一方向信頼群では、親友信頼H群の方がL群よりも「孤立傾向」の得点が有意に低かった( $t=-2.22, p<.05$ )。母子相互不信群では、親友信頼H群の方がL群に比べて「リラックスした気分」の得点が有意に高いというポジティブな側面が見られる一方で( $t=3.37, p<.01$ )、「反社会的傾向」の得点が有意に高くなるというネガティブな側面もある特徴が示された( $t=2.69, p<.05$ )。

父子間については、父子相互信頼群の場合に親友信頼H群の方がL群よりも「リラックスした気分」の得点が有意に高い( $t=8.40, p<.01$ )以外は、他のネガティブな内容の学校適応因子に関して有意な差が見られず、母子相互信頼群と同様な結果であった。父親一方向信頼群に関しても、母親一方向信頼群の場合と同様であり、親友信頼H群がL群に比較して「リラックスした気分」の得点が有意に高く( $t=3.18, p<.01$ )、「孤立傾向」が有意に低かった( $t=-2.42, p<.05$ )。次に、子ども一方向信頼群については、親友信頼H群の方がL群よりも「リラックスした気分」の得点が有意に高かった( $t=2.60, p<.05$ )。また、父子相互不信群では、親友信頼H群の方がL群よりも「リラックスした気分」の得点が有意に高く( $t=3.20, p<.01$ )、「孤立傾向」の得点が低い( $t=-2.37, p<.05$ )というポジティブな側面が見られる一方で、「反社会的傾向」の得点が有意に高くなるというネガティブな側面もあることが特徴として示された( $t=2.41, p<.05$ )。

以上から、母子・父子に共通して、親子相互信頼群は、親友との信頼関係の高低により異なるのはポジティブな内容の学校適応因子(「リラックス気分」)に限られ、その他のネガティブな内容の項目への影響は見られなかった。その一方で、親から子もしくは子から親へのどちらかの信頼感が低いタイプでは、親友との信頼関係がある子どもの方がそうでない子どもに比べて学校における「孤立傾向」の得点が低いなどの、ネガティブな学校適応の側面に対する親友のプラスな役割が示された。しかし、親子相互不信群では、親友との信頼関係が高い群が低い群に比較して「反社会的傾向」というネガティブな要素の得点が高く、同じネガティブな学校適応の側面であってもその内容によって、親友の影響は異なることが示唆された。

## 考 察

### 親子相互の信頼感と学校適応との関連

本研究は、思春期の特徴的な問題である学校適応の諸側面について、親子相互の信頼感および親友との信

頼関係との関連から検討してきた。

まず、親子相互の信頼感が、学校適応の諸変数に対してどのような影響を与えているかについて比較し検討を行った。その結果、学校適応の諸変数を予測していたのは子が親に抱く信頼感であり、親が子に抱く信頼感ではどの変数も有意に予測していないという特徴が見られた。ここから、例えば、子どもが学校に不適応な問題を抱えている場合には、親の子どもに対する信頼感を高めるように配慮するだけでは不十分であり、子どもが親に対して信頼感を高められるような具体的な要因を強化することが必要であると思われる。この様な要因は、親の養育態度や情緒のおよび物理的なサポートに関わるものと思われ、今後、子どもが親に抱く信頼感が高まる要因について検討することが重要であろう。

また、子が親に抱く信頼感が影響を与える学校適応の変数が、父親と母親によって異なることも特徴として見られている。愛着理論(Bowlby, 1969)などの従来の発達心理学的な研究では、子どもの社会性の発達に影響するものとして母子関係を重要なものとして注目することが多かった。しかし本研究では、子の父親に対する信頼感が、母親への信頼感では予測しなかった学校適応の変数(「反抗的な気分」・「不安な気分」・「孤立傾向」)に影響を与えるという結果が得られており、今後、父子関係に関して母子関係とは違った視点から検討していく必要性があるであろう。

親子相互の信頼感に基づいて分類された、親子間の信頼関係のタイプによる学校適応の比較からは、総じて、親子が相互に信頼し合っている家庭(親子相互信頼群)の子どもは学校での適応が比較的良く、親子間での相互の信頼感が低い家庭(親子相互不信群)の子どもは不適応な傾向にあることが示された。このように、家庭内における親子間の信頼関係の質が、学校場面における子どもの生活に影響を与えるという結果は、従来見られてきた親との信頼関係が子どもの社会的適応に影響を与えているとする研究(Perlman & Peplau, 1981; Renken et al., 1989など)を支持するものであった。

また、親一方向信頼群における結果は、学校適応の内容によって親の子に対する信頼感がマイナスとプラスの両面に作用することを示す興味深いものとなっている。まず、マイナスの側面に着目してみると、親一方向信頼群は、学校適応が総じて良好である親子相互信頼群に比較して学校での「孤立傾向」の得点が有意に高く、「リラックスした気分」が有意に低い。本研究の対象者である中学生は反抗期にあたり、自我の発達

とともに親への反発心が増加する時期である。とりわけ、親一方向信頼群のように子が親に抱く信頼感が低い場合には、その反抗心は一般的な状態に比べて激しいことが予想される。それに対して、この群の母親は子どもに抱く信頼感が高いために、子どもとの関わりを多く持とうとすることが考えられる。これらを合わせて考えれば、子どもは親との関わりをなるべく避けようとするが、親は過干渉になりがちで子どもに対して不適切な情緒的・物理的サポートを行ってしまう、といった親子葛藤が子どものストレスとなり、学校での適応を不良なものにしてしまうのかもしれない。親に対する信頼感の低さがどのようなメカニズムで学校適応に影響するかについては、今後さらに深く検討していく必要がある。

その一方で、親からの一方向的な信頼感、子どもの「反社会的傾向」に対してはプラスな役割を果たしていることが示されている。この結果は特に母子間において顕著であり、母親一方向信頼群の「反社会的傾向」得点は、学校適応が比較的良好な母子相互信頼群との間に有意差はなく、学校に不適応な傾向を示す母子相互不信群に比べて有意に低い値であった。この結果に関して、子どもの問題行動に対する家庭環境要因の影響を扱った研究についてメタ・アナリシスを行った Loeber & Loeber (1986) によると、反社会的な問題行動の発達に最も強い関連を示すのは、親の子どもに対するスーパービジョンの不足や親子の関わり方の希薄さ、親の子どもに対する愛着感の欠如などであることが指摘されている。子どもとの信頼関係が良好なものと認識している母親は、子どもへの愛着感や子どもとのコミュニケーションやスーパービジョンなども高いレベルにあることが考えられ、そのことが子どもの学校での「反社会的傾向」といった問題傾向を抑制している可能性が考えられよう。

以上のように、思春期における家庭内の信頼関係を母親、父親、子どものそれぞれの立場から異なる視点で捉えることによって、例えば親の子どもに対する信頼感がプラスとマイナスの両面性を持つことなど従来の親子関係研究ではあまり注目されなかった側面についてもより詳細に検討することができた。今後は、両親間の信頼関係（夫婦関係）やきょうだい、祖父母との関係性といったより広い家族間の信頼関係との関連を含めて分析していくことで、学校適応に影響する家族関係要因についてのさらに包括的な考察が可能になると考えられる。また、親子相互の信頼感が実際にはどのような行動を媒介として相手に影響を及ぼしている

のか、といったより具体的なメカニズムの解明についての検討が残されており、行動観察的手法を併用したデザインでの研究が今後必要であると考えられる。

### 学校適応に対する親子間の信頼関係と親友との信頼関係の相互影響性

親友との信頼関係と学校適応との関連については、親友との信頼関係の良好さがネガティブな学校適応の要素である「不安な気分」や「孤立傾向」などの低さと関連する一方で、親友との信頼関係の良好さは「反社会的傾向」の高さと関連しており、親友との信頼関係がネガティブな学校適応に与える影響はその内容によって異なることが示唆された。この結果についてさらに詳しく検討するため、親子間の信頼関係タイプごとに、親友との信頼関係の高低による学校適応の差について検討した。その結果、親子相互信頼群では、親友との信頼関係が高い子どもの方が低い子どもに比べて学校での「リラックス気分」の得点が有意に高いという結果が得られた以外、ネガティブな学校適応の要素に関しては両者の間に有意差は認められず、親との間に相互の信頼関係がある子どもは、親友との信頼関係の高低にかかわらず学校での適応がほぼ良好であると考えられる。

他の親子間の信頼関係タイプに関しては、特に親子相互信頼群に比較して「リラックスした気分」という学校適応に関するポジティブな要素の得点が低く、「孤立傾向」というネガティブな要素の得点が高いという特徴の見られた親一方向信頼群や親子相互不信群において興味深い結果が得られていた。これらの群は、親友との信頼関係が高い子どもの方が低い子どもよりも「リラックスした気分」の得点が高く、「孤立傾向」の得点が低いことが示され、親との間に相互の信頼関係があまり形成されていない家庭の子どもであっても、親友との信頼関係の高さが学校での適応を良くすることを示している。この結果は、親との信頼関係が良好に形成されていないために学校で不適応になりがちな子どもに対しても、親友の有無が、学校不適応の防御要因として働くとするこれまでの研究 (Stocker, 1994 ; Wasserstein & LaGreca, 1996) に類似するものである。しかし、親子相互不信群に関しては、「反社会的傾向」の得点が高くなるのは、親友との信頼関係が高い子どもの方であり、学校不適応の促進要因としても働く可能性が示唆される。

これらの結果から、例えば教室という集団場面においては仲間に入ることができずに不安や緊張が強い子どもであっても、違うクラスや学校以外の場所で親友

と呼べる存在がいれば、それが心の支えとなり、不登校や引きこもりといった重大な不適応的行動に結実することなく学校生活を送ることができるということが考えられるかもしれない。その一方で、「反社会的傾向」の強い子どもにとっての親友が、同じように反社会的傾向の強い“悪友”である場合には、その友人集団内で親和欲求は満たされリラックスできるかもしれないが、反抗的な逸脱行為はより助長される可能性が考えられる。AchenbachとEdelbrock(1983)は、児童・思春期の問題行動を不安や抑うつを中心とする internalizing problems (内在化問題)と、反社会的・攻撃的な行動を主とする externalizing problems (外在化問題)に大別している。本研究の結果をこれに倣って解釈すれば、「不安な気分」や「孤立傾向」は前者の internalizing な内容に類似するもの、「反社会的傾向」は後者との関連のあるものと考えられ、internalizing problems に近い学校不適応を持つ子どもたちにとって親友はポジティブな効果を持つ一方、externalizing problems に近い問題を持つ子どもたちにとっては、親友は本人の学校でのリラックスには役立つものの問題行動自体は助長してしまうというように、学校不適応に対する親友との信頼関係の機能は問題行動の種類によって異なってくることが考えられる。今後学校適応と子どもの対人関係との関連を検討していく際には、問題行動そのものの種類を考慮することが重要であると考えられよう。

最後に、今回の親友関係に関する項目は、現在の親友関係についてのグローバル評定であり、親子間の信頼感を測定した尺度のように、親友との間での相互の信頼感については検討されていない。また、本研究において対象児が選んだ親友が、学校においてできた親友なのか、それ以外のコミュニティでできた存在なのかの比較は行っていない。親友という存在がいつ、どのように形成されるのか、また、親友が思春期の社会性の発達に与える影響のメカニズムやその存在意義についてより詳細に検討することが今後の課題である。

### 引用文献

- Achenbach, T., & Edelbrock, C. 1983 *Manual for the Child Behavior Checklist and Revised Child Behavior Profile*. Burlington : Department of Psychiatry, University of Vermont.
- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment : A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Argyle, M., & Henderson, M. 1985 *The anatomy of relationships*. London : Methuen.
- Armsden, G.C., & Greenberg, M.T. 1987 The Inventory of Parent and Peer Attachment : Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 427—454.
- ボウルビィJ. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子・黒田聖一(共訳) 1976 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社 (Bowlby, J, 1969 Attachment and loss : Vol. 1 Attachment. New York : Basic Books.)
- Bradford, E., & Lyddon, W.J. 1993 Current parental attachment : Its relation to perceived psychological distress and relationship satisfaction in college students. *Journal of College Student Development*, **34**, 256—260.
- Bukowski, W., & Hoza, B. 1989 Popularity and friendship : Issues in theory, measurement, and outcome. In T.J.Berndt & G.W.Ladd (Eds.), *Peer relationships in child development*. New York : Wiley.
- Cassidy, J. & Asher, S.R. 1992 Loneliness and peer relations in young children. *Child Development*, **63**, 350—365.
- Davis, K.E., & Todd, M. 1985 Assessing friendship : Prototypes, paradigm cases, and relationship description. In S.W.Duck & D.Perlman (Eds.), *Understanding personal relationships*. London : Sage.
- Erikson, E.H. 1963 *Childhood and society* 2nd ed. New York : Norton. (仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会 1 みすず書房)
- Farrington, D.P. 1978 The family backgrounds of aggressive youths. In L.A.Herson, M.Berger, & D.Shaffer (Eds.), *Aggression and antisocial behavior in childhood and adolescence*. Oxford: Pergamon.
- Flannery, D.J., Williams, L.L., & Vazsonyi, A.T. 1999 Who are they and what are they doing ? Delinquent behavior, substance use, and early adolescents' after-school time. *American Journal of Orthopsychiatry*, **69**, 247—253.
- Fondacaro, M.R., & Heller, K. 1983 Social sup-

- port factors and drinking among college student males. *Journal of Youth and Adolescence*, **12**, 285—299.
- Garnefski, N., & Diekstra, R.F.W. 1996 Perceived social support from family, school, and peers : Relationship with emotional and behavioral problems among adolescents. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **35**, 1657—1664.
- Harter, S. 1988 *Manual for the Self-Perception Profile for Adolescents*. Denver, CO : University of Denver.
- 稲葉珠樹 1998 中学生の自己概念と母親の養育態度との関係 北海道教育大学大学院教育学研究科修士論文
- 伊藤美奈子 2000 学校ストレス 久世敏雄・斎藤耕二(監修) 青年心理学辞典 福村出版 Pp.329.
- Kitamura, T., Sugawara, M., Sugawara, K., Toda, M.A., & Shima, S. 1996 A psychosocial study of depression in early pregnancy. *British Journal of Psychiatry*, **168**, 732—738.
- 小泉冷三 1995 小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要, **44**, 295—303.
- 小嶋秀夫 1991 児童心理への招待 サイエンス社
- Kosawa, Y., Azuma, H., Kashiwagi, K., Suzuki, O., Shimizu, H., Gjerde, P., & Cooper, C. 1996 Japan-US study on self development and socio-cultural context in adolescence : Perceived psychological support and self competence. *Science Reports of Tokyo Women's Christian University*, 1431—1440.
- 小杉素子・山岸俊男 1998 一般的信頼と信頼性判断 心理学研究, **69**, 349—357.
- Loeber, R., & Loeber, M. 1986 Family factors as correlates and predictors of juvenile conduct problems and delinquency. In M. Tony, & N. Morris (Eds.), *Crime and justice : An annual review of research : Vol. 7*. Chicago : University of Chicago Press.
- 文部省 1994 学習塾に関する実態調査
- 永井洋子・金生由紀子・太田昌孝・式場典子 1994 “学校嫌い”からみた思春期の精神保健 児童青年精神医学とその近接領域, **35**, 272—285.
- 中山貴美子・藤内修二・北山秋雄 1997 親子・友人関係が中学生の主観的健康に及ぼす影響—思春期の子供を持つ親へのアプローチに向けて— 小児保健研究, **56**, 61—68.
- Parker, J.G., & Asher, S.R. 1993 Friendship and friendship quality in middle childhood : Links with peer group acceptance and feeling of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, **29**, 611—621.
- Patterson, G.R. 1986 Maternal rejection : Determinant or product for deviant child behavior ? In W. Hartup & Z. Rubin (Eds.), *Relationships and development*. Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Perlman, D., & Peplau, L.A. 1981 Toward a social psychology of loneliness. In R. Gilmour, & S. Duck (Eds.), *Personal relationships in disorder*. London : Academic Press.
- Renken, B., Egeland, B., Marvinney, D., Mangelsdorf, S., & Sroufe, L.A. 1989 Early childhood antecedents of aggression and passive withdrawal in early elementary school. *Journal of Personality*, **57**, 257—281.
- Rotter, J. 1967 A new scale for the measurement of Interpersonal trust. *Journal of Personality*, **35**, 651—665.
- 酒井 厚 2001a 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, **9**, 59—70.
- 酒井 厚 2001b 青年期の親密な他者との関係における信頼感 ヒューマンサイエンスリサーチ, **10**, 79—93.
- 総務庁青少年対策本部 1997 青少年の友人関係と問題行動に関する研究調査 「教育アンケート調査年鑑」編集委員会(編) 教育アンケート調査年鑑 1998年版上 創育社 Pp.79—108.
- Stocker, C.M. 1994 Children's perceptions of relationships with siblings, friends, and mothers : Compensatory processes and links with adjustment. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **35**, 1447—1459.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島 悟・佐藤達哉・向井 隆 1999 子どもの問題行動の発達 : Externalizingな問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から 発達心理学研究, **10**, 32—45.
- 菅原ますみ・小泉智恵・詫摩紀子・菅原健介 1997 夫

婦関係と子どもの精神的健康との関連—学童期の子どもを持つ家庭について— 安田生命社会事業団 研究助成論文集, 33, 144—150.

Sullivan, H.S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York : Norton.

東京都練馬区児童部児童課 1997 中学・高校生の生活実態・意識調査<東京都練馬区> 「教育アンケート調査年鑑」編集委員会(編) 教育アンケート調査年鑑 1998年版上 創育社 Pp.193—238.

Wasserstein, S.B., & LaGreca, A.M. 1996 Can peer support buffer against behavioral consequences of parental discord? *Journal of Clinical Child Psychology*, 25, 177—182.

Wentzel, K.R., & Caldwell, K. 1997 Friendships,

peer acceptance, and group membership : Relations to academic achievement in middle school. *Child Development*, 68, 1198—1209.

Wills, T.A., & Cleary, S.D. 1996 How are social support effects mediated? A test with parental support and adolescent substance use, *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 937—952.

付 記

長期にわたる縦断研究にご協力下さっている対象者のご家族に心より感謝申し上げます。また、指導教官である青柳 肇先生に厚く御礼申し上げます。

(2001.3.16 受稿, 8.24 受理)

Appendix 本研究で使用した変数間の相関

因子名	CMtrust	CFtrust	MCtrust	FCtrust	BestF	AGR	ANX	RLX	LN	CD
子が母親に抱く信頼感(子ども評定) : CMtrust										
子が父親に抱く信頼感(子ども評定) : CFtrust	.89**									
母親が子に抱く信頼感(母親評定) : MCtrust	.36**	.25**								
父親が子に抱く信頼感(父親評定) : FCtrust	.24**	.32**	.06							
親友との信頼関係 : BestF	.32**	.32**	.04	.06						
教室での反抗的な気分 : AGR	-.27**	-.29**	-.21**	-.07	-.15*					
教室での不安な気分 : ANX	-.20**	-.21**	-.07	-.04	-.23**	.51**				
教室でのリラックスした気分 : RLX	.34**	.31**	.07	.04	.41**	-.40**	-.41**			
学校での孤立傾向 : LN	-.28**	-.29**	-.05	-.06	-.37**	.56**	.66**	-.52**		
学校での反社会的傾向 : CD	-.22**	-.19**	-.22**	-.02	.12	.35**	.11	-.15*	.15*	

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

## Parent-Child Relations of Mutual Trust, Trust in One's Best Friend, and School Adjustment : Junior High School Students

ATSUSHI SAKAI (NATIONAL INSTITUTE OF MENTAL HEALTH), MASUMI SUGAWARA (NATIONAL INSTITUTE OF MENTAL HEALTH), KAZUMI MAESHIRO (SHIRAYURI COLLEGE), KENSUKE SUGAWARA (UNIVERSITY OF SACRED HEART) AND TOSHINORI KITAMURA (KUMAMOTO UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2002, 50, 12—22

The purpose of the present study was to investigate the relations among school adjustment, parent-child relations of mutual trust, and trust in one's best friend. A questionnaire assessing mood in the class (aggression, anxiety, and relaxation), maladjustment tendencies (loneliness and antisocial tendencies), and young people's trust in their parents and best friend was completed by 270 junior high school students. A questionnaire on parent's trust in their child was completed by 279 mothers and 241 fathers. The main results were as follows : (1) Youth who reported a relationship of mutual trust with their parents were well-adjusted to school. On the other hand, children who did not have a fully trusting relationship with their parents tended to be maladjusted at school. (2) For those children who did not have a relation of mutual trust with their parents, the extent to which they trusted their best friend was related to their tendency to be maladjusted in school (the loneliness and antisocial tendency measures).

Key Words : school adjustment, parent-child relations, trust relationships, close friend, junior high school students